
パパン、私は幸せです

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパン、私は幸せです

【Nコード】

N6286Y

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

拝啓、天国のパパン。

私は今日も幸せです。それもこれも全て、パパンが私の記憶と人格と頭脳の価値を認めてくれたお陰です。チートとは縁がないし、貧しいけれど平和な毎日を、日々妄想を楽しみながらその日暮らししています。男に産まれた当初は戸惑いましたが、それも最近ではすっかり慣れました。繰り返しますが、私は幸せです。

え、何降りてきてんの。チートいらないって言ったでしょ。私はこれでもいいの！ 結婚！？ ハーレム！？ ふざけんなああああ！

!

プロローグ 前編 チートなんていらなっ

気がつくと、真っ白な所に立っていた。

大勢人が集まっている。ちょうどその中心ほどに私はいた。

声が、聞こえてくる。

そちらを向くと、天使様が羽ばたいていた。集団の右のほうには様々な服装をした天使や悪魔、エルフたんや獣人、ドワーフっぽい人が並んでいる。

「ええと、皆さんこんにちは。貴方達は、私共の子供となること、つまりこの世界に転生する事になりました。より多くの子供達が幸せになれるよう、この世界では皆さんに転生の際の希望を聞いています。よく注意して聞いてくださいねー」

ええええええええ！！ 転生！？ すごい！ ありえない！ そっ

か、私、死んだんだ。そういえば、最近だるかった気がする。そっかあー。ああ、でも死んじゃったのか……。

……。まあ。チート転生できるんだからいいよね☆

「まず、皆さんに紙を配ります。上から順に、次の生での第一希望の望み、第二希望の望み、第三希望の望みを書く事ができます。頭の中で第一希望は可愛くなりたいー、とか、第二希望は頭が良くなりたいーって考えればそれで紙に文字が浮かんできます。では、注意点を述べていきます」

私の手に紙が握られる。真っ白な紙に、私の名前が書かれていた。

「いいですかー。まず、願いは第一希望から順に叶えられていきます。次に、同じ事を書いても、第一希望の方が遥かに強いです。例

えば、一般的な人が剣の技能を望み、努力したとします。すると、第一希望に書けば一流、第二希望に書けば少し上手い程度、第三希望に書けば普通の腕前が保証されます。こういう人になりたいというだけでなく、例えば、美しくなくてもいいやとか、貴族や王族にするぐらいだったら他の才能や健康が欲しいという人は、貴族や王族は除くと書くと、地位よりも才能に恵まれやすくなります」

第一希望ぶっちぎりで凄いな。魔法使いたい。

「転生の手順ですが、まず前世での行いをポイント化し、基礎値プラスランダムでポイントを追加します。ここから、願いをその人の向き不向きなどを加味して叶え、願いの分のポイントを引いて、あるいは足して行きます。残ったポイントを0になるまで生まれや才能、美しさや健康に振り分けて生まれてもらいます。また、それぞれに課せられた課題を達成すればご褒美がもらえますよ」

なるほど。

「紙を持って右の人達の所に行くと、一度だけアドバイスが貰えます。叶えられない願いがあればその時教えてもらえますが、二回目には叶えられない願いがあってもそのまま受理されます。貰えるアドバイスは、専門分野によって変わってきますが、みなさんの幸せを願うことに関しては変わらなくて安心して下さい。最終提出を行った担当者が来世の貴方の担当者、すなわち親となります。それと、転生すればここでの記憶は忘れてしまうので、相談を恥ずかしの資料が見ることができるので、初めてこの世界に生まれる人を見ておくのもいいでしょう。これで説明は終わりです。親として、貴方達の幸せを心から祈ります」

ぺこりと天使が頭を下げ、大多数の人々ががやがやと喋りながら並んでいった。

私はそれについていき、様子を見る。人のアドバイスというのを聞いてみたい。

天使はやはり人気だった。私はそちらにより、おじいさんと天使が話しているのを聞いてみる。

「第一希望の研究を完成させる、という願いは不許可です。なぜなら、それは才能ではなく、その人の行動になるからです。記憶を保持する、もしくはそれを可能とするほどの頭脳を授けることは可能です。でも、この研究は素晴らしいものです。その知識の保持となると、かなりのポイントを消費します。例えば、魔力もそれを理解する知能もない農民に生まれてしまえば、研究も無用の長物となってしまう。そもそも、それは貴方の記憶を持っても、別人なのです。貴方は大変高いポイントを持っていますが、記憶と環境と頭脳の三点をクリアするのは不可能です。それをどうするかよく考えて、もう一度持ってきてください。ただ、貴方の魂は学者として適正があるので、頭を良くする願いは比較的叶えやすく、生まれ変わってもその道を選びやすい傾向を持っていますよ」

「どうするかもう……」

おお、かなり細かく見てもらえるんだ。凄い。

「王様と正妃の子、美形、そして長男ですか……その場合それだけでほとんど全てのポイントを使いますが」

「うるせえ、言う事を聞け！」

ええ……。それってありなの？

この世界の王侯貴族はきつとろくなもんじゃねえな。

生まれがいいほど、消費ポイントが高いわけだし。

それから、しばらく聞いて回った後に、考えを纏めながら左へと向かった。

前世の記憶、それも価値ある記憶は高いらしい。それに、頭の良さもセットで貰わないと意味が無いようだ。人格も必要、と。

私は、考える。

記憶、人格、頭脳。

現状維持だけで終わるじゃん。

そして、考える。

私の記憶と人格と頭脳はいかほどのものだろうか？

いや、願いを変えるつもりはないんだけどさ。

資料をパラパラとめくる。

いろんな種族があるんだ。

へー、魔物もいるのか。

文明はあまり進んでないなー。

魔法がある。

大雑把に書いてあるそれをじっくりと読み、ぱたんと閉じた。

とても素敵だと思う。具体的に言うと、私が嵌っていたバーチャルリアリティゲーム、MMOと同じくらい素敵な世界だ。

ただ、ネットがないんだよね……。本もあんまりなさそう。何それ地獄？

しばし考える。

まず、内政チートは出来るだろう。少なくとも領主として大成できるはずだ。

となると、その知識の価値はいかほどか。

きつとものすごく高いに違いない。

次に、性格。これも高額だろう。凄く人格者だとは言わないが、まあまあいい性格だと思うし、犯罪者というわけではないし。

さらに、頭。これは記憶と表裏一体だが、この素晴らしすぎる頭

脳は高かろう。

現代人の中ではそりゃ悪いほうだが、行くのは中世ファンタジーですよ？

これは貧しい生まれ確定か……。

どころか、もしかして不可と言われるかもしれない。

高いポイント持つてるじー様がダメだしされてたもんな……。

中世レベルの発明でダメ出しされるんだから、そうとう記憶は高いに違いない。

私は重い足取りで、イケメンで空いてるという理由で悪魔の……いや、悪魔様の方へと向かった。

「すみません、お願いします」

「ん、担当官のルヴァキルだ。二回目も持ってきたら、俺がお前の父って事だな。じゃあ、見せてみろ」

パパンはそれに目を滑らせ、整った顔を顰めた。

「……んー……これは……ずいぶん思い切ったな。どうしたもんか……」

「え、と。生まれは悪くて構いません。醜くてもいいです。男でもいいです！　お願いしますパパン！」

「そりゃ無理だ」

パパンの拒絶に、私は絶望する。

「そんな！」

「つか、そんなに大量にポイント稼いで何がしたいんだ？ 剣士にでもなりたいのか？ これだけポイントがあったら、確かに世界一の剣士になれるが……。多分第一希望に剣士って書いたほうが早いぞ。第一希望に剣士とだけ書いておけば、俺がいいようにしてやる」

「どこから剣士が。嫌ですそんなの。え、っていうかもしかして私ってポイント高い？ 前世の行いとかランダムとか相当いい結果が？」

「前世問題外、魂高め、ランダム普通だな。結果普通より少し下か。だからって何も記憶を引き継いでまでポイント稼ごうとする必要はないぜ。完全に俺に任せるなら、そこそこ幸せな約束を確約できると思う」

「前世問題外ってひどいよ！ 親切に辻ヒールしたじゃない！ 良い事いっぱいしたのに！」

「それは善行じゃねえ」

「えー。でも、いろいろ我慢すれば記憶と人格と頭の良さはそのままにして貰えるんですね？」

「ん？ ちょっと待て。何か勘違いしてないか？」

「パパンは信じがたい表情で、私を見る。」

「えっと。お前の記憶、人格、頭脳。全部ぶちぎりでマイナス要素なの理解してる？」

「そんな馬鹿な」

パパンは難しい顔で書類をめくった。

「まず、記憶。小学校の頃から漫画、ゲーム、アニメ、ネットに入り浸り、高校時代にバーチャルリアリティゲームが開発されてから、引きこもってそれで遊び続ける。役立つ知識はなし」

「なんで！ VRMMOで鍛冶屋も裁縫も錬金術も医療も武術も極めまくった凄まじい宝庫じゃない！」

「あのな。ごっこ遊びと本物は違うんだ。ゲームでできたから現実でも出来るとかないから。どれも現実では通用しない。それに、恵まれた生活を知っていると辛いぞ。例えばこの世界にはネットも漫画も存在しない。言葉だって、大人が覚えるのと赤子が覚えるのじやわけがちがう。そんなわけでかなりのマイナス」

「えええええ！？」

「次、人格。二次元にのみ欲情し、腐女子。働いたら負けだと思ってる。コミュニケーション障害。この性格で生きて行けるほどこの世界は甘くない。かなりのマイナス」

「人格否定！？」

「頭。こっちの七才程度の知能で固定とかとんでもない。生きていくのも難しいだろうな。これだと魔術の行使も無理。当然マイナス」

「うげらっ！」

私は打ちのめされて机に突っ伏す。

「悪い事は言わない。この3つの願いは全て取り消せ。俺達は、子供達に幸せになってほしいと思ってる。その為には、この3つは邪魔なんだ。お前は一度死に、新しい赤子が産まれる。その子に、出来る限りの幸せを与えたいと思わないか？」

「記憶のない来世なんて他人じゃん！ どうでもいいYO！ お願い、パパン！ ポイントが何に付きいくつなのか知らないけど、3つの願い全部で三十ポイントぐらいに換算してよ！ マイナスとか酷いよ！」

「おまけにおまけしてマイナス三万ポイントだな。これ以上無理」

「マイナスすごっ！？ そこをなんとか！ ポイント増やせって言ってるんじゃないんだしさあ！ 三ポイントでもいいから！」

「うーん、マイナス一万五千までなら、なんとか」

「プラス以外認めないYO！ くそう意地でも今のままの頭脳で生まれてやる！」

パパンはため息を付く。

「いいか、俺達にはお前に努力次第で幸せになるチャンスを与える義務がある。なにより幸せになってほしい。これだけ大きなマイナス、どこかで挽回しないと幸せになんてなれっこないだろ？ 最低でも一万五千点分のテコ入れは必要だ」

「十分幸せになれるYO！ 幸せって誰の基準！？」

「俺の基準。学んで働いて子供作って育てる幸せ以外認めない！
したがって豪商の家で食っちゃ寝系のポイントの割り振り方も認め
ない！ ニートの幸せなんぞゴミ箱に捨ててしまえ！ 俺が人に誇
れる人間になれ！」

「地獄やアアアアアア！」

その後も土下座して願いの受理と三ポイント認定を願っていると、
他の人は全て転生し、私だけになっていた。

なんだなんだと担当官が寄ってくる。

うう、晒し者のヨカーン。

プロローグ 後編 納得の駄目さ

「まあ、ルヴァキル。だめよ、頭ごなしの否定は。私にいいアイデアがあるわ。まず、記憶、人格はそのままにしましょう。頭の良さもそのままに。三ポイントで換算すると、性別を男にすれば、生まれを少し貧しく、外見を並に、健康な子供として生まれられるわ」

天使がおつとりと紙を見て告げる。

「しかし！」

「けれど」

天使は一本指を立てる。

「貴方には、貴方の前世を正当な評価した分の高い魔力と隠蔽能力を授けます。これを使うも使わないも貴方の自由。……という事でどうかしら」

「あ、ありがとうございます！」

「待ちなさい。いくら殺人鬼ではないとはいえ、能力のない子に高い魔力を預けて野放しにするということですか？ それはあんまりです。王の座程度ならいくらでも革命できますが、魔力の場合は暴走した時、止められる者がいなくなってしまうます」

即エルフがダメ出し。つーか、王の座あっさり許可したのってそんな意図があったのね。怖いわー！

「何か他に意図して選択できる力を渡せば良からう。そうすれば、世界ぶっちぎりで一位の魔力も一流程度に調節できる」

そんなに私の前世、マイナス酷いんか！？ 私悪いことしてないじゃん！ あ、ごめんなさい、PK（ゲーム内で他プレイヤーのキアラを攻撃）したことはあります。

「その場合目標も、二種類決めないと駄目だな。前者なら働け、後者なら人の役に立て、かな……」

「両方共、少し難しすぎるのではないでしょうか」

酷い言われようです。

「私働いてたもん！ VRMMO内で一所懸命冒険者やったもん！」

その訴えはスルーされた。ひ、ひどい。酷過ぎる！

「よろしい。久々に全員でじっくり話しあいましょう。ミネルバ様にも許可を取らねば」

「大会議か。勇者が普通の家庭に生まれたいと言った日以来だな……。しかし、それも仕方あるまい」

何か大事キター。

「わ、私、ちょっとお前の前世に価値はあるって認めて欲しいだけなのに……」

丸くなって泣き出した私に、優しく担当官達は微笑む。

「私たちは、皆、貴方の幸せを望んでいます。大丈夫、ルヴァキルを……貴方のパパンを信じなさい」

「ああ、必ずまっとうな人間にしてやる」

パパンが言う。うう、まったくもって必要無いです……。そして、私の体は透けていった。

結果発表ー！ ドンドンパフパフ。

まず、私の名はルグナ。立派な男の子である。健康だけど、力がさほど強いわけではない。その代わり器用である。加護付きなので器用さは割と凄い。

ちよつと小柄。顔は並。

次に、私の家庭。

私のママン、フィアは未婚であり、貴族にはぼんくらが多い。以上。ちなみに援助はなく、女手一つで私を育てた。

加護について説明しよう。

ママンは私がお手伝いをした事がなくとも、勉強をせずとも、愛情を注いで決して何も言わなかった。7歳の頃。そんな母が病気に

なった。よろめきながらも、いつものようにご飯を作ってくれようとするママン。だらだら寝っ転がっていた私は、なにか凄く悪い事をしたような気になって、食事を作るのを手伝った。

母は泣いて喜んでくれた。

パパンも泣いて喜んでくれた。天界からわざわざ夢の中まで出張してくるほど喜んでくれて、とても立派な加護……器用さをくれた。目標、働くをクリアしたことによるご褒美だ。

あんまり喜ばれるんで、私は逆ギレした。

「バカにすんな！ 私だって手伝いの一つや二つ出来るわ！」

それ以来、たまに母を手伝っている。何か騙された気がしないでもない。面倒な洗い物中は特にそう思う。

いや、たぶん絶対騙されてる。

なんで私、洗い物なんてしてるんだろう。

おのれパパン。我が父ながら、恐ろしい男。

そんな事を思いながら、洗い物を拭いて運ぶ。ママンはニコニコしながらそれを眺める。もちろん、手はせつせと内職をしている。

さて、次に私には存在しない能力である。

存在しないたらしなのである。

其の一。魔力隠蔽能力。

其の二。超一流クラスの魔力。

其の参。パパン召喚（5回まで）

其の四。脳内パソコン。（魔力の簡単な基礎制御ソフトと剣士ソフト、基礎魔術リスト付き。基礎制御は抑える方向で常時発動。他に診断ソフト、植物辞典なども）

其の伍。亜空間物入れ。

其の六。お告げ（神様名義で私の保護を申請してもらえらしい）
其の七。パパンアドバイス（無制限）

……。貰いすぎじゃね？ 魔力隠蔽能力はいいよ？ けど、「超」一流クラスの魔力って何？ パパン召喚って超すごいことじゃね？ パパン悪魔の格好しているけど、その実態は神様だよね？ 脳内パソコン、ええ、魔力を操るには必要だと思います。基礎制御も、暴走を防ぐには必要です。ありがとうございます。でもさ。

剣士ソフトとか、基礎魔術リストとか、診断ソフト、植物辞典はやりすぎじゃね？

確認しかしてないけど、剣士兼魔術師兼医者にすぐ慣れるってありえなくね？

亜空間物入れ？ それってかなり高度な魔術じゃなかった？
つか神様名義で私の保護を命じられるってどういう事！？

パパンのアドバイスいらNEEEEEEE！！

ねーよ！

そこまでしないと幸せになれない私の前世って何！？

どこまで人を見下せば気がすむんだよ！

つか、パパン達は何を望んでいるの！？ 馬鹿に刃物をもたせるなって遠まわしに言ってたじゃない！ 十分すぎる人間兵器ですがなにか！？

くっそ、自分のプライドかかってなければ俺TUEEEEEしてやるのに！

ぜってー使ってやらねー！

私の前世を私が認めなくて、誰が認めるっていうんだ。

ママンが病気の時とか、超使いたくなるのがまた悔しい。

元から無いはずのものを使わないだけなのに、私が悪者みたいじゃない！

こんな能力、無ければ良かった。最悪だ！

プリプリしつつも、実はチート能力、使ってしまったっているんだよね。

其の七、パパンのアドバイス。

呼んでないのに来るの。来るの！ お祝いごとや誕生日やお正月

など、しょっちゅう来るの！

チート使うことになるからパパン来んなよ！　って言ってるんだけど全く聞き届けてくれる様子がない。

パパンに励まされ、叱られている事が物凄く嬉しいことが、またチートを活用しているみたいで腹が立つ。

……実は、言葉を碌に覚えられなくて、同年代の子供にバカにされてばっかで、それもあって友達とか全然作る気にならなくて、でもたまに寂しくて、ネットとか出来ないのが辛くて、そんな時に物凄く助けになってくれたりする。

ああもう、信じられない！

私、幸せになるから。

今の記憶と人格と知恵で、絶対幸せになるから！

くそう、ゲームのアイテムの名前と効果ならするする記憶できるのに、日常の単語は全然覚えられないんだよなあ。ちよっとお母さんの内職手伝いながら、しりとりでお勉強でもするか……。

……私がお勉強なんて。最悪だ……。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ

えいやああああ！ とおおおおお！！

私は布に気合を入れて針をぶっさす。

私の最近の日課は刺繍をして売っ払うことである。

ふふふ、絵心はあるんだ、絵心は。

私、生活していけるんじゃない？ ただ問題は刺繍で生活している男を見た事がないということなんだけど。私が新しい道を開拓してやるぜええええ！

そんなある日の事である。

一組の父子が隣の家にやってきた。

ローブに仮面姿の糞怪しい女の子と、人の良さそうなお父さん。なんでも、醜いからローブと仮面で隠してる的なうんたらかんたら。

そして、仮面にロマンを感じるのがこの私である。

ママンに隠れ、じっと観察する。

しかし、コヤツ残念だ。ローブが白の無地というのが行けない。私だったら、かなり怪しい刺繍を施して悪の人物っぽくしてやるのに。

糸代たくさん掛かるからしないけど。

ちなみにこの女の子、帯剣してます。それもあって怪しさ天元突破。

「あの。僕はリーファです。13歳です。よろしく」

「私はルグナ。8歳よ。よろしく。剣使うの？」

「嗜み程度です。ルグナは？」

「私は刺繍が出来るわ」

そして、しばし私は考える。

この私の素晴らしい過去を活用するなら、剣を習う事は必須じゃね？

剣の扱いなら自信あるYO！　なにせ（ゲームの中で）凄腕冒険者だったからね。

「剣、教えてくれる？　代わりに刺繍を教えてもいいよ！」

「いいんですか？　ありがとうございます」

微笑ましく笑う両親に見送られ、果物をもたせられて、私達は部屋を出た。

私は取って置き場所……ちよっと人に見つかりづらい小さな広場に案内する。

ここは木々で覆われており、しかも町の中の緑なので危険はない。私とリーファは木の棒を構え、対峙した。

まず、私が動く。ていやああああ！

な、何！？　VRMMOの時と体の使い勝手が違う！？

ジャンプ力が全くでない！？

棒の遠心力が！？

システム補正がない！？

結論から言おう。

あつという間に叩きのめされた。

おのれえええええ。VRMMO内なら負けないのに！

リーファはじつと私を見る。

「……ルグナ。君、前世の記憶って信じる？」

「あ、貴方も記憶持ち？」

サラっと言うと、リーファはこくりと頷いた。

「そっかー。えと、私と同じ異世界人？」

「異世界人なの？ あれは向こうの剣術？ おかしいと思ったんだ。物凄く変な癖がついてるから。まるで、棒の重ささえ重すぎるみたいな、身体能力が低すぎるみたいなの……」

あ、やべ。私は笑って誤魔化した。

その後、私達は果物を持って二人並んで話をしていた。

「君も、一般人になりたいくて？」

「え、えと、リーファは？」

私達は二人、笑って誤魔化した。

「えと、担当官を聞いてもいいかな」

「私のパパンはルヴァキル様」

「……僕もだ。悪魔と取引してでも、一般人になりたいと思ったから。君も？」

「私はパパンが空いててイケメンだから。そういやパパンの担当私だけだわ」

一瞬の間。そしてリーファは笑った。

「僕の時もそうだよ。そっか。パパンか。いいな。ね、君は秘密を守れる？」

「友達いないから話す人いないよ。私もバラされたくないし」

「じゃ、自己紹介で前世と願いや今回のポイントの事、一緒に言わない？ 僕も秘密にするよ」

「んー。いいか。いいよ」

私達はせーのと言う。

「元勇者、男。願いは一般人として人生をやり直したい。綺麗に生まれたい。女の子として生まれたい。ポイントが多すぎて、完全な一般人には慣れなかったから、今世では力を隠してる。ここへは、貴族に手籠めにされそうになって逃げてきた」

「えっと、こっちで言うところこ遊びの天才、かな。元女。願いは記憶、人格、頭脳の保存。お前の人生マイナス三万ポイントって言われたから、ふざけんな私の人生は三ポイントだあって前世セツト三ポイント計算で産まれた。健康を得るにはちよっとポイント足りなかったから男になったの。ただ、マイナス三万ポイント計算の能力も持ってる。私の人生の価値が掛かってるから、使う気はないけどね。ただ、パパンと話せる能力があって、それはいつも使ってる。向こうが勝手に夢に尋ねてくるのよ」

私達は沈黙した。

その後、リーファが爆笑する。

「マ、マイナス三万ポイントってどんな前世だったの!？　すごい力を持たせられるって事は悪人じゃないんだろうけど。あはは、ぼ、僕より多いよ!　くくっあ、ごめ、でもルヴァキル様、いや、パパンと話せるなんて凄いね」

「勇者よりポイントが高いとはこれいかに。ちなみに私のチートは7つまであるぞ!　しかし、オカマ勇者かー。親近感湧いてきたわー。男と恋愛とかした?　でも貴族からどうして逃げたん?　一般人で女の子で美人だと、手籠めとか人身売買ルートしか無いじゃん。玉の輿だからいいんじゃない?　不細工だった?」

「オ、オカマじゃないよ!　ただ、姫さまみたいに愛されて、守られるのが羨ましくて……ちやほやされてみたくて……。でも、実際に生まれ変わって見たら、女の子ってすごく大変なんだ。剣を振っている方が性に合ってるし、いざ口説かれたら怖くて気持ち悪くて……」

「私も女を抱く気はないなあ。育って性欲出てきたらどうなるかわからんけど。それに私、男は絵が一番好きだなあ。格好いい人いたらそりゃときめくけど。セックスはいらんわー。ね、いつか困ったら偽装結婚しない?　大人になっても相手がいないと体裁悪いじゃない。子供できなくても養子引き取ればまあ周囲の目は和らぐし。私貧乏だから、嫌かな?」

「助かるよ!」

「ちなみにレズ?」

「じ、実は僕、女の子って少し苦手なんだ。守らないといけないし、相手が大変だし……」

私とリーファは微笑み合う。

「でも、それだと僕も稼がなきゃね。冒険者は意味がないしなあ」

「でも好きなんでしょ？ 戦いが。気にせず好きな事すればいいと思うよ。隠れて魔物退治してもいいわけだし。リーファは特に縛りはないんでしょ？ 主にチートを使うと前世の価値が全否定されるとか」

「確かに、力を使うとまずいつてわけじゃないけど。気にせず、好きな事を、か」

「バレたら逃げればいいよ。独り立ちしたら親は関係ないし。旅とか好きだよ？ でも私にチート使わせようとしたら即効見捨てる」

「わかった」

それから、私とリーファはよく遊ぶようになった。

薬草辞典はいらんけど、リーファから色々教えてもらうのは全然オツケー！

でもおかしい。VRMMOでは一目で見分けついたのに、現実の草は見分けつかんとか絶対におかしい。

世の中はきつと不条理で出来ている。

ちなみにリーファと会った日の夜、パパンが来た。

早く孫の顔が見たいと言っていた。偽装結婚だというに。

なんか、突然変異のチート持ちより親の素養を受け継ぐチートの方がポイント低く済むらしく、恐らく二人の子の枠は大人気になるだろうとの事。

あの、王様の長男にしろっていったおっさんがたくさん来るのか

……。

嫌だわー。怖いわー。絶対愛する自信がないわー。

子が親を選べるのに親の方が子を選べないというのは不公平すぎると思う。マジで。

素質目当てに生まれてくる子なんて絶対嫌じゃん。

私の子はもれなくチートオリ主転生になるのか……子作りなんて絶対しないわ。

リーファに気持ちを話すと、リーファも王様狙いのチンピラの話にドン引きしたらしく、納得してくれた。

パパンは泣いていた。

んなもん知らんよ。

あ、リーファはママンの事をママンと呼ぶようになった。

私もリーファのお父さんの事を父上と呼んでいる。

事実上の婚約である。ママンと父上は喜んでくれている。

こっちでは腕輪だが、リーファには元日本人として指輪も贈ってあげたい。

料理研究もしたいし、稼ごぞー。

……しかし、実際の料理って大変だね。物が溢れたり焦げたりするんだぜ？　ありえない。

ちなみにリーファの顔はあの後見せてもらった。馬鹿じゃね？

マジ馬鹿じゃね？　こんなんが歩いてたら、攫われて売られて犯されるに決まってるじゃん。それぐらいわかれ。リーファが今まで無事なのはきつとパパンの加護以外の何者でもないと思う。

前世もこの世界で生きてたならわかるでしょ。パパンも願った段階で教えてやれよ。なんでもたくさん与えれば幸せになれるってわけじゃねーんだよ。

そう指摘したら泣かれた。

何か私に指摘されたのがショックだったらしい。

パパンもリーファも酷過ぎる。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ（後書き）

注意書き…書きたい事は三分の二ほど書ききったのでこの後は何も決まってるじゃないです。勇者はこのまま良き友でいるかも知れないし、ヤンデレるかもしれないし、（チートバラす的な意味で）裏切るかもしれないし、他の人間に恋するかもしれません。

期待しちゃ駄目よ☆

二話 パパンのラブが重いです

「これをこうして……そうそう」

私とリーファは刺繍のお勉強をしていた。
午前は刺繍、午後は剣技である。

「リーファは本当にルグナくんが好きだね」

「ルグナもリーファが好きなのよ。いつもリーファちゃんのお話ばかり」

両親が見守りながら、暖かく会話する。最近いい雰囲気である。
二人が結婚したら素敵なのに。主に経済的意味で。

ま、リーファンとこも夜逃げしたせいでお金ないけどね。

あ、リーファも外じゃ苛められ気味。当たり前ですよー。仮面じゃあ……。

最近は二人で小さな魔物も取ってくる。

あくまで子供が狩っても問題ない、小さな魔物である。

子供の手に余るはずの大物を狩った時はその場に捨てている。

最初の頃は大変だったけどね。だって……現実って血が出るんだぜ……？

素材ってのは、皮剥とかして得られるんだぜ……？

とにかく、私達は、互いに支えあって少しずつ成長している。

リーファは独り立ちが割りと目筋だったりするけど、仮面したまままで働ける所はあまりない。

つーか顔焼けば？ と言ったらパパンに超怒られた。

そういうわけで刺繍やなんかは大切なお仕事だ。

魔物の素材なんかを売った余剰金額で色々買い、最近リーファ

に着せる服を作っている。

目指せ悪の幹部っぽい服。

後、代筆業も始めました。

リーファに教えてもらって私が書いている。

現代日本出身の私としちゃ、代筆業っていずれは消えるでしょーってイメージがあるので、本業にはしないけどね。

旅もするんだし、出店で刺繍がいいかなあ。

一応、ママンには将来、リーファと結婚して見聞を深める旅にするのもありだと思っていると告げている。

ママンは定職について欲しそうだった。

ファンタジーだと、旅人だとか冒険者が主流だよね？ 意味分かんらん。

パパンの意見は却下ね。宮廷魔術師になってハーレム建設って親が言うことか。

ということで回想している間に服が出来たのでリーファの所に持っていく。

「似合う、かな」

どこから見ても悪の幹部。超格好いい。制作に半年かけたかいがあった。

私は手を叩き、褒め称えまくった。

「素晴らしいYO！ どころはどう見ても怪しいよ！」

「ほめられてるの、かな……？」

そう言いながらも、リーファは頬を染めて自らの姿を術で写し、眺めている。

鏡なんて高級なもんはないです。

中二病心をくすぐる服を、リーファはなんだかんだで気に入ったようだった。

勢いに乗って二人でそのままギルドに出かけたら絡まりました。何か凄腕魔術師と勘違いされたっぽい。

「服を作ったから幼なじみの一般人に来てもらったんだYO！ 冒険者なんだからそこらへんの餓鬼と凄腕魔術師の区別を付けられるようになるがいいよ！ 主に身振りとかで」

リーファの後ろに隠れながら主張する。

「服を作ったって……お前が魔具を？」

「ほえ？」

そこに、魔術師らしき人がやって来て、歩み寄って私と服を交互に眺めた。かなり立派な服を着ている。

「坊やに魔力はないようだ。これは、祝福だね。たまに、神様に気に入られると祝福が与えられるんだ。珍しいデザインだから、神様が気に入ったのかもしれないね。譲ってはもらえないかな？」

「え……。えと、リーファ」

「僕はいいよ。着替えてくる」

「坊やは、服を作る職業につくつもりなのかな？ 祝福っていうのは神様に腕前を認められたという事。一度気に入られた人は、祝福持ちの道具を作りやすい。きっといい職人になるよ」

「あ、ありがとう」

その後、リーファはいつもの白いローブに着替えてきて、ローブを渡した。

うん、何か凄い心当たりがあるね☆

ちなみに結構な金額になったそれはリーファに渡した。

帰途に着くと、私は早々に眠った。

夢にはやはりパパンが現れた。

「パパン」

「なんだ？」

「祝福。したでしょ」

「し、してないぞ」

私はじとつとパパンを見る。

「他の神にしてもらったが」

「パパン！ 過保護もいい加減にしてYO！」

「正当な評価だ！」

「子供の作った安物の布と縫い目の荒い服のどこが正当な評価なんだYO」

「本当に、着たいって子がいたんだって！ 食べ物なり、物なり、コピーしたら祝福するのが決まりだし……」

「んー……。わかった」

「なあ、ルグナ。俺にも一つ作ってくれ」

「……まあ、いいけど。祝福は最低限にしてね？　で、希望は？」

「そうだな……」

これは確実にお金に変わるからと、ママンにお金を借りてちよつと良い生地と糸で作った。

これも半年ぐらいかけて縫ってリーファとギルドに売りに行く。完成した時点でパパンが持って行っているから心配はいらない。あ、羽入れる穴は自分でつけてくださいって言った。こっちは羽のついた種族なんて無いからね。デザインだけ後から穴を入れることを考慮した作りになってる。

「パパン、喜んでた？」

リーファはクスクスと笑って聞く。

「喜んでた喜んでた。調子に乗って手料理も作れとか言ってた。祝福するって言ってたから借りたお金をママンに返した後は山分けしよう」

「いいのか？」

「いいよ。大人になったら夫婦になるんだし」

「ああ、うん……。な、なんか照れるな」

そうして二人でギルドにつく。

「おねーさん。鑑定して。また祝福ついてるかもしれないし」

「あら、ルグナくん。そうそう祝福は……ついてるわね。すごく強力なのが。あらちよっと困ったわ。ギルド長呼ばなくちゃ」

なんですと？

結果、とんでもない金額になった。

そして魔具神殿からオフアーが来るかもしれないと言われた。

阿呆じゃね？ パパン阿呆じゃね？

こんな大金持ってたら襲ってくれと言っているようなもので、ギルドに預けてたまに必要な分だけ引き出すことにした。

ちなみに魔具神殿とは、様々な物を祭壇に捧げる簡単なお仕事をしている場所だ。

神様にとってのお店みたいな場所で、そこで気に入ったものがあればコピーを貰って祝福を授けるというものだ。

神様は子供からのプレゼント嬉しい、神殿も祝福嬉しい。

これぞウィンウィンの関係。

でも祝福乱舞は禁止されているらしい。祝福乱舞は禁止されているらしい。

言いたい事はわかるね？ パパン。

結論から言おう。

珍しく一人で遊んでいたら誘拐された。魔具神殿への売買ルートキタコレ。

それとも閉じ込められて魔具生産かな？

どうせ祝福するのはパパンだけだろうし、祝福乱舞は禁止されているし、こりゃ用無し殺されフラグだな……。

それだけでなく、子供が祝福受けないと殺される、もしくは解雇されるって状況だからと祝福するのは禁止されている。超禁止されている。どれくらいかというと、物の良さの測定が行われるくらい。時には祝福を完全禁止もありうる。

でないと同じ状況が多発するからだ。神様はいつもより多くの子供達の幸せを考えている。

つまり、オワタ。

あーあ。

しかし私はVRMMOでの経験を生かした大逆転を執行するのであった。多分。

三話 それぞれの努力

SIDE ルグナ

ふつくつろっに入れられてー。エッサホイサエッサホイサエッサ
ホイサとっ

あ、馬乗った？ いやん揺れる吐く吐く吐くって吐いた！ 臭い
！ 顔にかかった！

SIDE リーファ

あれ？ いつも先に来てるのに……。いないな、ルグナ。

「さっき子供が攫われていったぞ」

「大丈夫か？」

まさか、まさか！

「あの、それってどんな子供でした！？」

「どんなって、どこにでもいるような茶髪の男の子だったが。冒険
者かい？ 怪しい格好だな」

「どっちの方に行きました！？ し、知り合いかもしれないんです
！」

「あっちの方向だよ」

「ありがとうございます！」

ルグナ、もしかして魔具狙い！？　どうしよう、魔力隠蔽能力があるから探索術は効かない、何より他の魔術師に感づかれる。

大丈夫、魔具狙いならすぐには殺されないはず。

落ち着いて探すんだ！

ルグナ、ルグナ！

S I D E 天界

「ルグナが攫われたアアアアア！　　ノア！　お前の担当の子供だろう！　どうにかしろ！　どどどどうにかしないと！　そうだ下界へ行こう！」

「落ち着きなさい。あの子達は必ず悔い改めます。貴方はもう少し子供を信じなさい」

ノアと呼ばれた天使はお茶を飲みながら、慌てるルヴァキルを宥める。

「……この前もそう言いましたが、攫われた私の子は犯されて売られて売れなかったのは殺されましたね」

ぼそっとエルフのエリアが告げると、ルヴァキルは青い顔をした。

いい加減、ノアもエリアも子供が誤ちを犯してしまったり、悲しい最後を迎えるのは慣れている。もちろん、愛している事に変わりはないが、勝者がいれば敗者がいて、生まれている時しか手を貸してやれないのだから仕方のないことだとわかっている。

しかし、ルヴァキルは未だに慣れない。特にルグナには手をかけていたので、なおさら動揺は激しかった。

「下界へ行く！ 手続きして来る！ そうだ、手続きの間の足止め
に魔物出してもらわないと！」

ルヴァキルは走る。いつもなら引き止めるが、今回は5回までルヴァキルの暴走は許されている。その暴走の機会は、国の存亡などに出てこられるよりも、このような些細な願いに使われたほうがいいだろう。

子供を直接手助けできる事を羨ましく思いながら、神々は彼を見送った。

S I D E ルグナ

小屋に降ろされました。不機嫌です。超不機嫌です。
美形だからってなんでも許されると思うなよ。元乙女をゲロまみれにしたのは許されない罪です。

「水よこせ。暴れられると困るって言うなら、しばっててもいいから、洗え。お前のせいで汚れたこの顔と頭と体を、洗え」

「お、おう」

水の入ったタライと布で、体を綺麗にしながら問うた。

「お兄さん、服が綺麗で若くて美形だね。なんでこんな事したの？」

「はっ子供にわかるか。お前は俺の言うとおりに、俺の代わりに魔具神殿に出す物を作るんだ!」

……は？ 代わりに出す物を作れと申したか。

「……確認するけど、魔具神殿に売り飛ばすんじゃないの?」

「そんな事しても俺の成績にならねえじゃねえか!」

アホじゃないの? アホじゃないの? アホじゃないの?

「ぼくの作った物を、お兄さんの代わりにそのまま出すの?」

「そうだ!」

このアホ、職人としてのプライドがないのだろうか。

「お兄さん、ぼくの作ったもの見たことあるの?」

「ああ、縫い目が下手だしへんてこだし、どうしてあんなものに祝福が与えられるんだか不思議でしょうがねえがな! あんなんだったら俺の方が立派だね。これだから神に愛された奴ってのは卑怯なんだ」

「お兄さんの作ったもの、見てみたい!」

「おうよ、見てみろ! どの道俺の作った物に似せて作らせる予定だからな。ったく、一週間もかけて作ったのに、また祝福がつかなかったんだよ」

自信満々に見せられたのは……なんていうか……。豪華っぽいだけで絶対着たくないわ……。…」

「お兄さん。その服、祝福なしだといくらで売れるの？」

「祝福なしの服なんざ売れるかよ！」

「人間でさえ買わない、たった一週間で出来る量産品を、どうして神様が着たいと思うの……？」

「……」

「……」

蹴られた。職人気取りのこのアホは死ねばいいと思う。

「俺の作品が量産品だど！？」

「僕、一着半年かけるよ。おにいさん、我慢して待てるの？」

また蹴られた。

「お前はとにかく量産すればいいんだよ！」

「お兄さん、若いよね。もしかして、勘違いした？　ちいちゃい子や若い人が作った出来の悪い品を、いーこいーこ、次頑張れって、おもしろ半分に買っていく事はあっても、いい年した大人が量産したゴミを毎週買うバカはいないよ。愛されてるとか愛されてないとか、馬鹿じゃない？　いや、愛はあるか。お兄さんごときの作ったものを今まで祝福してあげたことがもう愛だよね」

せせら笑うと、更に殴られる。

「商品に傷つけるの？　どこまで馬鹿なの？」

「うるせえっ才能のある奴にわかるか！　恵まれた奴に何がわかる！　俺は、俺は……！」

「底辺を味わったこともない癖に、何いってんの？」

血を吐きながら、吐き捨てる。

「飢えた事がないよね。着るものに困った事もないよね。技術が全く無いわけでも無いみたいだし、美貌もある。全部持つて、高望みしなければ職人でも男娼でもなんでもやって生きてけるよね。生まれ、才能、美貌、それだけ揃ってよく言える。私の服なんざ、ちよっと子供が目新しい物作ってるからって買われただけなんだよ。その程度もわからないほど、脳みそ空っぽなんでちゅかあ？」

殴られる。

「無抵抗の餓鬼を殴るのは楽だね。神様の事考えて、神様に着てもらいたい服、人間よりもドワーフよりもずっと優れた服を作るだろう神様に、「お願い、着て」って言える服、そんな服を作った事、一度でもあるの？　あんたを下界に送り出した神様と祝福した神様、今頃泣いてんじゃない？」

殴る。殴る。殴る。

ボロボロに成った私は、ただ蹲るしかなかった。しっかりと男を睨んだまま。

私は小屋に閉じ込められた。羊皮紙と共に。とりあえず明日また来るので服のデザイン考えとけだそうだ。

私は基本、やりたい事しかやらない人である。よって羊皮紙は目のつかない場所に放り投げた。

わかつてる。素直にニコニコ言う事聞いていれば、どうとでもな
ったって事。

わかつてる。チートを使えば、どうにでもなるって事。

でも、私は私なのだ。

どうしようもないこの私が、たまらなく愛しい私なのだ。

パパン、心配するかな……会いたいと思ったパパンは、この日に限って夢に現れなかった。

SIDE
リーファ

よかった、向かった方向は関所じゃない！

もう門も閉じるし、朝までに見つければいい。

候補地は大体70前後。

見つけてみせるから、待っていて、ルグナ！

何あれええええええ！！

魔物の大群！？　こんな時に！　子供でも倒せるような弱いやつ
 だけど、この数は邪魔！

ルグナアアア！

SIDE
天界

「ルグナが死んだらどうする！ 急げ！」

「いいえ！ 今日の仕事が終わらない限り、降臨は許しません！
致命傷じゃないから大丈夫です！」

「致命傷じゃないってなんだああああ！」

S I D E 職人

……あの餓鬼、死なねえよな。死んだら使えなくなる。
思い切り、壁を叩く。

っわかってんだよ！ わかってんだよ、俺が甘ったれの糞野郎だ
って事くらい！

ああそうさ、俺が魔具神殿で祝福を受けられたのは、あいつと同
じ年で服が作れたからだ！

ちっちええ子供の作った物ほど、祝福を受けやすいって知ってん
だ。

知ってたんだよ……。

だから俺は首になる前に、こっちから飛び出して……それであの
餓鬼の事を聞いて……。

ちっ頭ん中ぐちゃぐちゃだ。

……初めて祝福を受けたのはなんだっけ。金に困って売っぱらっ
て、もうどんな物か覚えてすらない。

俺を下界に送り出した神様、か……。珍しい神話を知っていやが
ったな。全ての人間は、神に祝福を受けて生まれてくるってやつ……
俺は信じちゃいなかったが……。

俺は……俺は……。

……神様に着て欲しい、ドワーフよりも優れた服を作る神に向か
って、それでも着て欲しいと願える服か……。

俺は、紙にザカザカと描き始めた。

着て欲しい服、着て欲しい服……。

あの餓鬼が半年かけて作るんだ。俺は一年かけて作ってやろう。なに、祝福が受けられなかったら、王族にでも売ればいいんだ。

……最低でも王族が着たいと思う服を、作ればいい。

俺は頭空っぽの顔だけ王子を思い出して、顔を顰める。

売るのはあいつ以外がいいな。つか、俺も顔だけとか男娼は嫌だ。

……嫌なんだ。俺は職人でありたい。くずでも下手でも、職人でありたい。

あの餓鬼は、明日返そう。

三話 それぞれの努力（後書き）

語尾のYOがうざいという感想がありましたが、わざとです。
主人公はうざく！ アホに！ なにせニートですから！。

あ、リーファの服の祝福、あれパパンが他の神様に自慢しまくった
からです。

四話 神様はいつも君を見守っている

S I D E ルグナ

暇。

暇。 ひま。 ヒマ。

そうだ、ここは悲鳴を上げても誰にも届かないと言っていたな。

ここは一つ、プライベートタイムを楽しむべき。

断じて寂しいからじゃないからね！

いやー、家、貧乏で部屋が一つしか無いから、プライベート無いんだよね。

……さて。

私は不思議な踊りを踊り始めた。

見よ！ VRMMOでどれだけ変な動きが出来るか競い合い、見事一番をとってみせたこの姿を！

でも関節が逆に曲がらないのが辛いなー。

私はしばらく踊っていた。

……疲れた。なんだあいつ、まだこねーのか。扉を蹴るが、そんなじゃ開けられない。

このまま忘れられたりしないよな。

そのまま飢え死には嫌だなあ……。

短い一生でした。とりあえず、今のところチートは使う気無いけどさ。死んでも。

んー。

なんだろう。微妙に覚悟は決めてるけど、じつとはしてられないこの感じ。

これをそわそわするとうんですね！

次は一人劇場でもやるかー。

ふ……驚くが良い。

私はVRMMOで五キャラまで同時にコントロールできていた！
そんな私の一人芝居、受けてみよー！

題して！

「彼氏ったら酷いの。メイド服を着るのが好きなんですって。そりや別れて当然だわ。そうよね！ 私はネコミミ裸エプロン派なのにー！ 友達やめよっか」愛と涙の冒険活劇！

SIDE 天界

「ルヴァキルは行ったようですね。まあ、怪我は後遺症なく治る範囲ですし、後遺症があったとしてもルヴァキルが治すでしょう」

「おや、御覧なさい、ノア」

エーリアがノアを呼び、ノアは下界を覗いた。

「？ あら可愛い。踊っているわ。変な踊り。ビデオ撮りましょう」

二人がじっと見ていると、なんだなんだと神々が寄ってくる。そのうち、お茶会が始まった。ルグナを眺めながらお菓子を食べ、書類を片付けていく。

「可愛い可愛い。子供が踊るのは良いのう。子供はたまに愉快的動きをするわい」

「お、一人芝居が始まりましたね。あはは、可愛い」

「うまいうまい」

「くだらんのう」

和やかな雰囲気で神様が増殖していく。

ところで、祝福は食べ物や物だけでなく、剣技や劇にも与えられる。

小さな子供を遊ばせておくと、いつの間にか菓子を食べているというのはこの世界ではよくある風景である。

そうして、神々の撮った可愛い子供の動画や、神々が強く祝福した魔具は、神々のアルバムに描かれる。

これは超強力な魔具いや神具として、下界でも僅かに流通していたりする。

アルバムには戦闘や防具、武器、可愛い子供の悪戯など、多岐に及ぶ。

昔、孤独な戦士が、「誰にも知られずともいい。ただ、小さな部屋、胸を張って、俺は頑張ったと言えればそれでいいのさ」と、強力な魔物を屠ったことがある。

それは決め台詞と共に各種アルバムに乗せられ、表彰され、ついにお告げで戦士を讃えよ！と言われ、吟遊詩人に歌われ、なぜか当の戦士が泣いて逃げたという確かな実績を残している。

神々は和やかに、和やかに、子供の可愛らしい劇を撮り続けた。
もちろん、劇をじゃまする魔物やルヴァキルの攻撃呪文は排除で
ある。

SIDE 下界

「……くっそろそろ門が開いてしまう……！ 最も、それどころじ
やないみたいだけど。一体、この魔物の群れはなんだというんだ！
？ 魔王復活！？ くっ転生してすぐにまた魔王と戦うことになる
とは！」

魔物の群れが真つ二つに避ける。

そこにいたのは……！

「パパン！！」

「うおおおお！！ ルグナはどこだあああああ！！」

悪魔が、大きく吠ええると、町外れの小屋以外の全ての屋根が吹き
飛んだ。

吹き飛んだ屋根は道端に落ちる。リーファの行く道を塞ぐ形で。

「……パパン……」

「降るのだ！ 眠りの雪！」

しんしんと降る雪に触れた兵士たちや、家に隠れていた人々は眠
っていく。

「パパン……」

「パパン！」

「アホかあああああああ！！！！！！！！」

リーファの、渾身の剣の一撃がパパンを吹き飛ばしていた。
悪魔を一撃のもとに倒す、勇敢なる仮面の戦士。
それは人々の心と神々のアルバムに焼き付いた。

「ルグナは僕が助けるから、帰れ」

「し、しかし……」

「帰れ。邪魔だから帰れ」

ぶちきれて襟首を掴み、説得するリーファ
こうして、泣く泣くルヴァキルは帰っていった。

SIDE 職人

なんだか昨日の夜は悪魔が訪れ大変だったらしい。全部の屋根が
吹き飛んだとか。

眠る人が続出で大変である。

三階の宿の一階に泊まっていて良かった。

魔法とはいえ、雪は雪。俺のスケッチブックが汚れてはたまらな

い。

さて、餓鬼のところに行くか。

SIDE ルグナ

人の気配がしたので、劇をやめた。

やれやれ、第三部までやってしまったではないか。
遅いぞ職人。

「餓鬼、やっぱりお前いらねえ。返すわ。ほらよ」

投げられたのは、薬……？

「飲んでおけ」

ちょうど喉が乾いていたので、つい飲み干す。すると、痛みが消えていった。

それを見て、職人が頬を緩める。

何こいつ……これが不良が優しくしたらキュンとなるとか、吊り橋効果とか、ストックホルム症候群とか言う奴か……！？ イケメンはこれだからけしからん！

と、そこに、大量のお菓子や果物や飲み物、花、小物が降ってきた。

「……なんか踊ってたりしたのか？ やっぱりお前、神に愛されてやがるな」

「？」

「劇や踊りが気に入られると、アルバム登録されて、神様がプレゼントしてくれるんだよ。こういう祝福はお菓子が大半だからすぐわかる」

「……見てたの？ アルバムって何？」

「王侯貴族が持っている、各地の可愛い餓鬼のお遊戯や優秀な剣士達の戦い、あるいは魔具の詳細を収めた本だ」

……。

／（＾○＾）／オワタ

ふざけんな密室で安心して何が悪いプライバシーとかふざけんな
ええええ！？

「俺は、魔具神殿に帰るよ。そこで勉強しなおしだ。お前も帰れ」

何その勝手っぷり。

とにかく、私は部屋を出た。

「ルグナ————！！」

「リーファ！ 探しに来てくれたの！？ ……って何これ！ 屋根吹き飛んでるじゃん！」

リーファは私に抱きつき、訴える。

「助けが遅れてごめん！ えと、パパンが弱い魔物の大群に町を襲わせて、大声でルグナはどこだあああって、屋根が吹き飛んで、それで、触ると眠る雪を降らせて、とりあえず殴って返したけど、眠った人が起きなくてどうしようルグナアアアア」

「え。なにそれどういう事？ 怖いんだけど。パパンて悪魔？ お前何者？」

……。

うむ。

召喚回数減ってる。呼んでないのに。呼んでないのに。呼んでないのに。

私は深いため息をついて、ぱちんと指を鳴らした。

「ルグナああ！！ ルグナの一人劇場見逃した！ 親の俺が何故アルバムで我慢しなければいけないんだ！ もう一回やってくれ」

「ひっ悪魔！」

現れてすぐ私に抱きつくパパンに、怯える犯人。

「うん、一人劇場はアルバムから抹消してほしいな☆」

「嫌だ」

「抹消しろ」

「嫌だ」

「抹消しろおおおおお黒歴史大公開とかふざけんナアアアアアア
ア！！！」

私の必死の訴えに、どうやらパパンは納得してくれたらしい。

「後、雪で眠らせた人起こして。これ、召喚としてカウントしていいから」

私の中で、二つカウントが減る。

「んで、私があげた服、来てみてよ。これもカウントね」

「そんな事でいいのか？」

「うん」

パパンが手を振ると、服が変わった。うん、似合ってる。ああ、でもやっぱり服が粗末すぎるなあ。もっと腕を上げないと。

何か犯人は凄く呆けた顔でパパンを、具体的にはパパンの服を見ている。

「パパン。最後の一回は、結婚式だから。今度勝手に来たら、結婚式招待しないから」

「なんだと!？」

驚愕するパパン。

「じゃあね、パパン。さて、犯人、行こうか」

「な、何だよ？」

「もうこの街にはいられないじゃん。挨拶だけして、出る」

「あの、ルグナ！」

リーファは、切なそうに告げる。

「僕、父上とママンを置いてけない。それに、僕は目立ちすぎた。ついていくのは、無理だよ……。足手まといになるし、適当にごまかす人間がいたほうがいい。だから……ごめん」

「いいの？ リーファ」

リーファは、頷いた。

「パパンを叩いた時、気持よかったんだ。やっぱり、僕は勇者としての僕に、凄く未練があるんだと思う。自分を見つめ直したい。いつか、また会おう。これ、受け取ってくれる？」

渡されたのは、対の腕輪の一つ。

「先にプロポーズされちゃったね。ありがたくもらっておくね」

私はその腕輪を嵌める。

「じゃ、行くよ、犯人。魔具神殿へ。後、私の名は今日からルナだから」

「マテよ、俺は連れて行くなんて一言も……げはっ！」

リーファが、犯人を殴りたおし、すぐ側に剣を突き立てる。

「ルグナに何かあったら殺す。悪魔に愛されし子に傷ひとつつけたらどうなるか、身を持って知ったろう。次は国が滅ぶぞ」

冷たい眼差しでリーファがいい、犯人はこくこくと頷いた。
そうして、私と犯人は旅立つことになったのだった。

町が、もうあんなに小さい。
私はそれを目に焼き付けた。

「あの、ルナ様」

「何、マノ」

「ルナ様はあの悪魔様の子供なのでしょいか」

私は肩を竦める。

「この世界の人間は全て神の子だよ。私を転生させてくれた神様があの人。パパンは凄く過保護な方だと思うけど。ちなみに、転生させてくれる神を選ぶのは人。生まれや才能や外見を選ぶのも人。子が親を選び、親は子を選べない。言ってる意味わかる？」

「じゃあ、なんで出来る奴と駄目な奴がいるんですか？」

「立派な人生を送ると、ポイントが貰える。それとランダムのポイントと基礎ポイント、これを生まれや才能や外見に振り分けるの。といっても、調整が必要だから希望が三つ言えるだけなんだけど。マノは美貌と生まれと才能に振ってるんじゃないかなあ」

「うげ。もうちょっと才能に振るときゃよかったのに」

「振った時の記憶がないから、才能に振ってその道に進まなかった時が危険だよー。でもまあ、マノは全部自分で選んだんだから、自己責任だよ。神様に愛されていないとかいうの、今後禁止！……マノを祝福して愛してくれている神様はちゃんというから」

「俺を愛してくれる神が……」

「ポイントの総量が足りないと思うなら、良い事いっぱいして来世の為にポイント稼ぎなよ。それに、神様がマノに出した宿題を見つけてクリアすれば、もっと才能強化してもらえるかもよ！」

「宿題！？　んなもんがあるのか！？」

「うん。一人一個。私は働けだった。まあそんな感じの宿題だから、精一杯生きてればいつか出来るよ」

「そうか……」

マノは、じっと手を見る。

「神様は、俺の作った服を着てくれるかな。悔しいけど、似合ってたぜ。あの服」

「ちいちゃい子からのプレゼントはともかく、立派な職人からゴミは受け取らないと思うYO！」

「うっ……ひでえ。いいよ、やってやるよ。初めてなんだ。こんな気持ち。俺の服を、神様に来て欲しいんだ」

「その年でそのセリフは致命的だと思うYO……。つーかよく祝福もらえてたよね」

「い、今から生まれ変わるんだ！」

「ガンバレー」

「お前は頑張らないのかよ」

「次作る服はもう決めてるから」

マノに着せることも決めているよ。
私はまだ、ボコられた復讐は、していないからね！

五話 こうして精進料理は消滅した

魔具神殿についた。

ここから私の新しい第一歩が始まる。

神々よ！ 私は一つ宣言しておく。

パパン召喚チートはノーカン！

おいやめる回数を復活させるなそういう意味じゃねえ。

……。戻った？ 回数ラスト一回に戻った？

頼むよ、困るんだよ。あんなチートいららないよ。

うん。泣かないでパパン。ごめんね。

うん？ 召喚を願いを叶える回数とカウントするならば、願いを

叶えずに降臨するのもありなはず？

……パパン。ありじゃありません。

やめてください。わたしの幸せのために。私の幸せのために。私

の幸せのために。

私のこの頭脳と！ 記憶と！ 人格で！

私は立派に生きてみせるよ！

「おい、独り言は終わったか？」

「うん、話し合いはついた。さすがに魔具神殿だけあって、学ぶ所がいっぱいあるんだね」

「詐欺も多いぞ」

「工房借りるだけだからいいよ」

「……作り方わかるのか？」

「さっぱり！　でもまあ何とかできるっしょ」

主にVRMMOやってた時の勘で。

だいじょーぶ！　人類は皆、石を木の棒に括りつけた物から銃へと技術を発展してきた！

二足歩行ロボが作れるとは言わないが、私も0から頑張って鉄器時代ぐらいまではいけるはず！

「……うちの工房に来るか？　有料だが、住む場所はあるし、好き勝手見れるし、好き勝手な物を作る」

「いいの？」

「有料って言ってるだろ」

という事で、マノの工房とやらについていく。

そこで、私は思わず声を上げた。

そこにはいろんな施設があったのだ。

焼き物も、服も、武器も、アクセサリーも、絵画も、あらゆる物を作る施設がある。

台所も完備で、かなり広い。施設自体は使い込まれているが……。やはりマノはいい所のボンボンである。

いろいろ案内してもらう。

最後に案内されたのが、魔具神殿の下級祭壇だった。

誰でも祭壇に祝福して欲しい物を置いて祈ることが出来るらしい。祭壇には神官が常駐していて、祝福がされると、魔具神殿が優先的に買い取る権利を得る他に、わずかながら報奨も出る。

物にもよるが、本当にわずか。子供相手なら飴とか。

不思議と、魔具神殿に献上予定の物は祭壇にあげられるまで祝福が起きないらしい。

上級祭壇もちろんある。それは魔具神殿内にあって、魔具神殿で暮らす職人が物を捧げる時やかなり大掛かりな物を捧げる時に使うらしい。

早速入居申請を行い、見学を行う事とした。

V R M M Oで鍛えたセンスを舐めるなー（バリバリ）

ところで魔具神殿に祀られていた神様達を天界で見た覚え無いです……。他のグループの担当官なのかな。

神様があの場にいた方達だけだとは思ってない。

しかし絵本等を見ても、パパンっぽいのか見た覚えがなかったので、なにか寂しい。

材料もいろいろあるし、まずは食事ついでに手料理をパパンに捧げてやるか。

ちなみにマノはバイトしながら制作に入るらしい。

私は色々と材料を買い込む。パパンにはリクエストされた肉料理があるのだ。

納得が行く出来の物が出来るまで、何度も作る。

残った物は食べていいよと言いついて、出来たものを神殿に持っていく。

「……料理を捧げるのですか？」

「神様に食べて欲しいので。上手く出来たよ！」

「まあ、神は御心が広いですから大丈夫でしょうが、祭壇を汚してはなりませんよ」

「わかった」

料理を祭壇に捧げ、召し上がれ、と言ってみる。

祝福は最低限にして欲しいと事前をお願いしてある。パパンがル

グナと大声で叫んだせいで出る羽目になったことは気に病んでいるようなので、こんどこそ守ってくれるはずだ。

捧げられた料理は、ものすごい勢いで発光しだした。

……おい。

神官さんは驚いてそれを見た後、慌てて鑑定して、少し悩んで金貨を私に握らせた。

料理に祝福が授けられるのは新発見なので、その分の料金らしい。いや、神様は料理を祝福すること多いうって聞いたけど。

多分気付かれないまま食べられているんだろうなあ……。

そして参考なまでにレシピを聞かれたので、教えておきました。

仕方ないから、これ全部料理研究費に使うかね。

もらった金貨で白紙のノートを幾つか買い、そこにレシピを記していくことにする。

最初のページはもちろんパパンの教えてくれた料理だ。

そして私は材料を色々買い込んで、だいぶ減っていた料理の残り物を食べて眠りについた。

「あっパパン！ 最低限の祝福にしてって言ったでしょ！」

パパンはなぜだかすごい勢いで落ち込んでいた。

「食べ逃した……。祝福というか、コピーは一度しかできないんだ。だから……orz」

「あ、そうなの？」

「もう一回作ってくれないか？」

「それは、何度でも作ってあげるけど……。祝福は最低限ね。で、そんなに喜んでくれたの、食べた人？」

「ああ、奴も大好物だと言う事を忘れていた。そして横取りが好きだということも忘れていた」

神様にも難儀な性格の人がいたもんだな。

「まあいいけど。私の創作料理も気が向いたら食べてね」

「楽しみにしている。魔具神殿で成り上がりというのもいいな」

パパン、私があそこにいられなくなった事はもういいんですね、わかります。

イラっ☆ときながらも、まあこっちでの生活も楽しくなりそうだしと思ひ直す。

気ままに適当にモノを作って売るといふ生活も悪くはない。

ライバルは阿呆ほど多いが、観光客もかなり多いので、そこそこの売上を見込めるはずだ。

特にこの私のVRMMOで鍛えた素晴らしい味覚とセンスを持つてすれば、頂点を極められるはずだ。

翌日、早速料理を作って下級祭壇に持っていく。

既にコックが長蛇の列を作って、祭壇に捧げる順番を待っていた。そして神官が時間の札を配っていた。

なんでも、神様が料理も祝福することが発見されたものの、冷めた料理は失礼だろうということで捧げる時間は一時間に定められたらしい。

それで、おおよその時間を書いた予約札を配っているのだ。

下級祭壇はかなりスペースが用意してあるのに。すげえ。

コックさんは悲喜こもごもの様子で料理を持って帰り、あるいはその場で売っている。

さすがに、料理は神殿で消費するというわけには行かないらしい。私は番号札の時間にあうように料理を作って持っていた。

今回はささやかな祝福を得て、もらった僅かな報奨金で、大安売りしている料理をいくつか買って帰った。

料理目当ての人が大勢いて、私の祝福付きの料理も売れた。

思わずたくさん買ったのでご馳走したが、食い詰めている人は結構多いらしく、喜ばれた。

しかし、コックが買いたる物に走りまわったので店が混んでいる上に食材が微妙に高くて品薄になっている。

仕方ないから、現在の食材は保存して、金属でも買おうか。

鍛冶にチャレンジである。まあ見よう見まねでなんとかなるっしょい。

すっごい火傷してマノに救出された。回復薬はもう持ってないから二度と怪我すんなんて。

失敗失敗☆

とりあえず様子見しながら服でも作るか。

心配して下界に押しかけようとするパパンうざい。大丈夫だってば。

六話 私の料理は世界一!!! (同ジャンルの料理人0の意味で) (前書き

んーと、Technical Artsに爆笑した直後に書いたの
で、かなり影響を受けていると思います。今話でやっているのは料理
だけです。後短くてすみません。

六話 私の料理は世界一イイ!! (同ジャンルの料理人0の意味で)

なんか、あんまり豪快な失敗っぷりに、師匠がついてくれました。それにしても、私が知識を披露する度に吹くのはなんでだろう。とりあえずエア鍛冶をやってみろと言われて、言われたとおりにしてみたものすごいツッコミを受けまくりました。

もう鍛冶はやめようと思う。

「お前の鍛冶にかける思いはこの程度のものだったのか？」

「肉球系武器は買う事にする」

「ねえよそんなもん」

「な、なんだってー!? 基本じゃん!」

「どこがだ」

「萌アイテムの!」

私が一生懸命に説明すると、職人のガノアさんは遠い目をした後、さっさとじゅぎょうの続きをした。

しゃーない。マノに復讐しないとだし、鍛冶はするかあ。

そんなわけで鍛冶の勉強、始めます。

まあ教わる方もてけーなら教える方も大怪我だけはうざいからすんなレベルのものなので、割りと私でも順応できている。

あ、料理もちよつとずつ覚えているよ。服を作る準備も始めている。

なかなか忙しいです。

何か、料理担当になりつつあるけど、嫌いな洗い物は皆がやってくれるからいいや。

そして、半年が経った。

「できた！ 天使の誘いゝバーリトウッドなバトロワでゝ！ 見よ！ この素晴らしい料理を！」

私が料理を捧げ持つと、皆がなぜかドン引きしていた。

「凄い見かけだが。そのカラフルな斑点はなんだ」

「見た目なんて飾りよ！」

「匂いが……ありえん」

「匂いなど、おまけよ！」

「お腹壊さないか？」

「危険を冒さずして何が美食か！ 古来より大勢の人達が命をかけて食べられるものと食べられない物を判別していたのだ！」

「味がいいのか？」

「笑止！ 味にこだわっているうちはまだ未熟者よ！」

「お前は何がしたいんだ」

マノのツツコミに、私は崇高な目的を教えることにする。

「食べた時の衝撃、そしてそのリアクション！ それこそがネタ食の真髄！ 食べると吹っ飛ぶから！ 殴られたみたいになっ飛ぶから、ぜひ試してみてください！」

「アホかアアアアアアアアアアアア！」

マノが私を殴り、その後ろで一口食べてみたガノアが吹っ飛んだ。ふふふ、魔術師様の作った菓を頂いてきて作った我が最高傑作の威力を見たか。

これはレシピ入りだな。

そしてマノには復讐として無理やり食べさせた。

何故か、この私の素晴らしい芸術を誰も理解しなかったので早速パパンに食べさせるべく魔具神殿に献上に行った。予め予約札はとってある。後、その場で売ろう。

「これは……！ こ、こんな物を神に捧げるのですか？」

「失礼な。最高傑作ですYO！」

「いや、失礼。確認しますが、毒ではないですね？」

「素晴らしさのあまり中毒性はあるかもね。とりあえず、持続性はない」

神官さんは不安に思いつつも、許してくれた。

料理には祝福がかけられたが、神官さんはいまいち祝福を解析しきれなかったらしい。

解析してもその効果がなんの意味があるのかわからないと言っていた。

とにかく、小銭をもらった私は料理を売った。

「ず……ずいぶんな見かけで、かなり高いな。馬鹿か？」

ざわざわと遠巻きに見る民衆。

そんな時だった。私の目の前に、次々に物が降ってきた。

料理の祝福である。

長年の謎とされていた唐突な祝福は、実は道具の使い心地がよかつたり美味しかったりすると起きるのだ。

料理をきっかけとして、最近判明した。

「味はいいってことか？ 坊主、一つよこせ。……ぐはあああつ！」

「飛んだ！？ 宙を飛んだ！？」

「ありえねえ！ 神様が罨に手を貸しただと！？」

ざわめく人々。男が地面に接する直前、クッションが現れて男を受け止め、消えた。

その後、お菓子が一つ、空から男の腹に落ちる。

神様は先程のリアクションに満足なされたようだった。

「あー、祝福ってクッションか。さすが神様」

私の言葉にどよめく人々。

「天使の誘いゝバーリトウッドなバトロワでゝ安いよ安いよ。一口で未知の世界が味わえるよ。しかも今なら神様の加護で安全に着地！」

結局、いくらもしないうちに売り切れ、私の周囲には菓子が転がっていた。

子供達が、せっせと菓子を拾っている。

ふ……私は天才かもしれん……。

最近、鍛冶もようやく形になってきた。

あと半年もすれば私の復讐は完遂する。逃がさんぞ、逃がさんぞ
マノ……！

私に手を出した美形であることを後悔するがいい……！

あ、レシピちよーだいつて言われたんであげました。

後でパパンにもレシピ強請られた。我が芸術は神すら動かすか……と良い気になっていたら、危ないからとクッション効果の付与されたレシピにして返された。

安全面にしか目がいかないとは、神もその程度だったか……。

いや、確かに危ないのでそのレシピは広めたけどさ。

さて、マノの服作るかあ。

六話 私の料理は世界一イイ!! (同ジャンルの料理人0の意味で)

(後書き)

感想返信に結構裏話しているんで、覗いてみてください。

それと作者は感想乞食なので、感想、拍手コメしてくれると物凄く喜びます。

今回の場合、具体的には明日の朝までにもう一話書いちゃうくらい喜びます。

裏話。

もちろん、人々が吹っ飛ぶ光景はアルバムに●RECされてます。効果はわかってても味がわからなかったためにドキドキしながら食べてみた神様達ですが、大受けしてわいわい言いながら食べました。後から出た祝福はもちろん、食べた神様の様子に笑った他の神様が投げ渡したものです。ちなみに換金したら結構いい値段ついた。味は口の中で弾ける感じ。それはもう弾ける感じ。でも衝撃の中、一瞬感じる味覚はウマー。

次回B.L的表現があります。お気をつけ下さい。
以下ネタバレ

メイドガイの、バフ子がエロメイドな服を着せられて写真取られて

「責任とれ」をそのまんまやります。ネタパクってばかりですみません。でも凄く面白いものは、真似して書くと凄く楽しいです。せめてものお詫びに元ネタは毎回書くようにしています。

七話 王子「この絵に書かれた乙女を嫁にしたいので連れてこい」

SIDE マノ

ついに、服が出来上がる。俺が全てを、それ以上を込めて作った服が。

頭にはいつも子供の頃に読んだ絵本の女神を思い浮かべていた。神はどんな服を着るのだろうか。神は、どんな服を喜ぶのだろうか。

どんな仕事をする？ それには、どんな服が相応しい？

過去に祝福された服や、様々な服のデザインを調べた。そして必死で考えだして作ってみた服は、作った本人の俺でさえため息をついてしまうほど美しいものだった。

神よ、神よ。どうか、この服を、着て欲しい。

貴方の事を心から思い、この服を贈る。

俺が下級祭壇に服を持って行くと、皆、あるいは驚き、あるいはため息をついていた。

服を捧げる。何も起こらない。

心臓が破裂しそうになる中、じっと待つ。

そして、一時間ほど待って、肩を落とした時だった。服は、激しく光り輝いた。

それと共に、俺自身に光が降りてくる。

『マノ。貴方は、使用する人の事を考えて物を作る事が出来ました。人生の宿題を解くことの出来た貴方を、誇らしく思います。この加護が、貴方の為になりますように』

優しく語りかける、どこか懐かしい女性の声。俺は自然と目から涙を流していた。

「おめでとう、マノさん。貴方は神の試練を見事達成なされました。して、加護は」

「あ……ああ……。鑑定だ」

「それはとても良い加護を得られました。どうか、その力神殿の為にお使いください。心配する必要はありません。軽いバイト感覚で大丈夫ですよ」

「あ、ああ……。鑑定か。そっか……。器用さとかだと嬉しかったんだが……。いや、俺の腕が認められたんだ、文句はなしだな。そっか……。俺は……」

俺は、ふにやりと笑ってしまった。

「情けねえなあ。職人の俺が、長年かかってようやく解いた宿題の内容が、人の事を考えて物を作る事か」

「宿題とはそのようなものです。解いてみれば簡単ですが、それを生涯のうちに見つけ、克服することは難しい」

神官の優しい笑みに、俺は頷いた。

服は、法外な値段で買い取られた。俺は、今日、本物の職人になったんだ。

もう、道を間違えたりしない。

今日は、人生最高の日だ。

そう思っていた俺は、ルグナの言葉に冷水を浴びせられた。

「マノ。今日から夜まで、私に絶対服従してもらうから。他の皆には事情を話してある。これは、復讐だよ。じっと、準備が整うのを、

マノが人生最高の日を迎えるのを待っていた。一年前の殴られ、町を出ざるをえなくなった復讐。今日、受けてもらう」

今の俺なら、前の俺がどれだけ愚かだったが、なんて罪を犯したのかわかる。ルグナが優しいから、軽く接してくるから忘れていた。俺はどこまで愚かなんだ。こんな小さい子供が、親元から離されたのに。

だから、俺は頷くしかなかった。それに、舐めてもいたんだ。優しいルグナが、そう酷い事をしないって。

その日は、人生最高の日であると同時に、人生最悪の日ともなった。

……いや。それは始まりに過ぎなかったんだ……。

S I D E ルグナ（ルナ）

ふふふ、ついにこの日が来た！ 意外に子供想いの皆さんを味方につけ、復讐をいざ決行！

さあ、絶望に泣いてもらおうか……！

「私がマノに求める事はただひとつ！ 私の服を着て、私の指示するポーズをして、絵を描かれてもらう！」

「へ？ そ、そんなんでいいのか？」

「私にはこれ以上の復讐は思いつかないよ！」

「そ、そうか……。まあ、いいけど。悪いことしたと思ってるし」

マノはそう答え、周囲の者が沈痛な面持ちで顔をそらすのに怪訝な顔をした。。

そして、渡された服を見て、マノは絶叫した。ふふふ、その顔が見たかった！

「なな、なんだこれ！？ 布の部分が少ない！？ 透けてる！？」

「エロメイドにゃんこ服！ この世の至宝だよ！」

「アホかアアアアアアアアアアアア！！」

「さあ！ 着てみて！」

「諦めて着ろ」

「お前のことは忘れないぜ、マノ……！」

寄ってたかって、皆でマノを着替えさせる。もちろん、カツラとかパット入りブラも完備だ。

そうして現れたのは、はにゃにゃーん、押し倒しちゃいたいほど可愛いエロにゃんこメイドなのでした！

「じゃあ、私のポーズを順番に真似してみてね。笑顔で！ セリフ付きで！ じゃあまず、はにゃにゃーん。ご主人様、おかえりにゃん」

「言えるかアアアアア！！ 何だそのポーズ！」

私はぼそつと言う。

「殴ったくせに。職人に乱暴を加えたんだよ。手が動かせなくなる可能性もあったんだよ」

「う……！ わ、わかったよ。は、はにやにやーん。ご、ごしゅじ、んさま。おかえりにや……ああっ恥ずかしい」

「いいよいいよー。その調子でドンドン誘惑しちゃって！ はっはっは、いけないにゃんこだ」

「ちくしょーーーーー！」

そんなわけで、存分にマノを描きました。みなさんもスケッチするとは、さすが友達甲斐がない。あ、カトトカっていう、バナナのような細長い果実はもちろん食べてもらったよ！ その後ぶちきれて責任取れーーーーー！ って叫んできたから、ダイジョブ！ 私なんちゃってホモだから、こうしてたまにエロい服着てエロいポーズ取るなら養ってあげるくらいはいいよ！ って言ったらドン引きされた。

復讐が終わったら、服、肉球武器、絵を下級祭壇に持っていく。もちろん、羞恥プレイである。まさかエログッズをコピると思えないからだ。

結論から言おう。

祝福されちゃった。

誰が着るの!?

神官が一瞬祝福が無いものと勘違いするほど小さい祝福ってのがまた、ああ……着るんだ……的な何かを感じてすごく嫌です。

神官さんも戸惑ってるよ、ほら! しかも上級神官との話し合いの後、「祝福はなかった」って事になってるし!

神様なんだから、後でこっそり一人で真似して作るとかさあ! つつーわけで、後は道端で復讐セットを売った。買い手がつかなかった。

「ちえー」

「当たり前だ!」

私はぶつくさ言いながら、マノはプリプリしながら、他の皆さんは苦笑いしながら帰る。

夜。パパンに、私の将来と性癖について本気で心配された。

「ところであの服祝福したの誰?」

そこで顔を赤らめて逸らさないでください。

私もパパンの性癖が激しく心配です……。パパンは違うよね?

パパンが変態とか、嫌ですよ私。

そんでもって翌朝。

大量の、秘密厳守の依頼が私の元に舞い込んできていた……。

復讐セットの買取依頼もかなりたくさんあった。一番高い値段をつけた所に売った。

わーいだいはんじょー。

だがしかし、下級祭壇に捧げてから売ってねというパパンの願いは承諾しかねます。

いや、だから誰が着るのか教えてよ。

っーかパパンではないときっぱり否定してください。

だがしかし、顔を赤らめて俺は違うと必死に説得されても信じられない不思議。信じるって難しい……。

七話 王子「この絵に書かれた乙女を嫁にしたいので連れてこい」(後書き)

TS、残酷描写、BL、ハーレム(一人目)、逆ハー(一人目)と。
これでタグ詐欺じゃないよ!

後は主人公に落ちぶれてもらってパパン降臨すれば粗筋も詐欺じゃなくなるね!

たくさん感想、ありがとうございました。おかげでモチベーションが上がってスラスラ書けました。

今回のネタはマニアックですが、ネタは15禁に抑えたつもりです。
笑っていただけたら幸いです。

という事で今日はもう感想返しして0時更新の素晴らしい作者様方の作品を見たら寝ます。

ぐっすり寝られそうです。ありがとうございました。

八話 破滅の前兆

そんなこんなで服の腕前がかなり上がって来ましたよ。

あ、納品間に合わないから、人を雇いました。

これで私も一城の主だよ、ふふふ。

もちろん、納品先は秘密です。

私がデザインして、皆に作ってもらう。

そして、私はデザインされたものを着たお客様を美化二百%増で描くのだ。

私の才能は十二分に発揮されているではないか。これのどこがマナスなのかね？

はっはっは。

あ、もちろん、秘密を漏らしたら殺される勢いで厳守です。

稀に絵を複製して売る許可が出ることもある。もちろん羞恥プレイです。

でも凄いね。

私が半年かけて作る服を、プロは一週間で作るんだよ。

ありえないくない？

しかも手は抜いていない。

とにかく、そんなこんなで半年経ちました。

それから、貴族が訪ねてきた。

「イ・ケ・ナ・イにゃんこの悪戯を描いたのは君かね？」

「コスシリーズ一作目ですね。そうですが、依頼ですか？」

「モデルが誰か教えてもらえないかね」

「コスシリーズは秘密厳守が鉄則です。教えたら自殺されたなんて、貴方も寝覚め悪いでしょう？」

貴族は、困った顔をする。

「それは、確かに困るね。その方は高貴な方だったりするのかな？」

「少なくとも私より遥かに育ちがいいです」

「なるほど。実は、さる高貴な方が、嫁に迎えたいと仰っている。それで、それとなくその人の事を見に来たのだ」

「では、1つだけ。この方は粗暴な男です。そしてコスシリーズの絵は、美化二百%増が基本です」

「お、男！？ そんな馬鹿な！」

「ちょっとした悪戯なんです。絵ならどうしても描けます。残念ですが、諦めてください」

君の後ろでマノが百面相してるしね。とりあえず、復讐が終わった相手をさらにいたぶる趣味はないです。

「なんて事だ、ようやく王子の男色を治療できると思ったのに！ いや、この際男でも構わない！ むしろ女装しているだけ一歩前進！」

……ヲイ。

かなりやばい香りが漂ってきたので、さっさと追い払った。

「さて。お金も溜まったことだし。次の街に移動しよっか☆」

「お前の図太さはたまに見習いたくなる」

「まあね。自分に値段をつける為なら、たくましくもなりますよ。マノが女の子なら、玉の輿にさせてあげたってことで有益って話になるんだけどなあ。男じゃあ、マイナスポイントが更に増えそう」

「意味がわからんが、俺は売らないってことだよな？」

「他の人がどうかはわからないから、サクッと逃げるよ？ 準備でき次第出発ね。絵越しに男の娘だとわかるなんて、かなり年季の入った変態だから。そうだね、私と競えるかもしれない。しかも奴はリアルちんこを持ってるからね」

「お前も持ってるだろ。うう……わかった。権力者の男娼とかろくな香りがしねえ……」

ということで、残りの依頼のデザインをラフ画で書いて後は君に任せた！ と押し付け、依頼リストと絵のリストは口の硬そうな人に任せた。

そして、また放浪の旅に出るのだった。

今度はどこに行こうかね。

なるべく人の多い所が良い。

人を隠すには森の中なのさ。

それでいて、王都は避ける。王族を敵に回すと大変な事になるからね。

チンピラで変態って、いい事ないです。

さすがに国を跨ぐのは色々手続きが必要だから、偽名じゃ無理なんだよなー。

密航でもいいけどさ。

つきました。港町です。

交易の盛んな街。人もいっぱい。物もいっぱい。

マノの鑑定がとても役に立ちそうである。

とりあえず、商会を訪ね、マノの能力を説明して雇ってもらおう。

私？ もちろん寄生ですよ。

それで仕事の傍ら、服を作って売る。

マノは服を評価され、鑑定の腕を評価され、誘われた。

実質、鑑定の腕9割だと思う。それでも、マノは祝福なしの服を買って貰えることに喜んだ。望めば、他国にも連れていってもらえるという。異国の服に、マノは憧れた。

その頃、私は疎外感を感じていた。

いえね。

もともと、私はニートだ。

今までは、おんなじような人達相手に接してきた。

でも、ここは無理。全く合わない。

しばらく、マノの為に奇抜な服と食事は封印しないといけないだろうし。

そうすると、私の腕ってさほど良くないんだよねえ。正統派な服の作り方わからんし。

移動したほうがいいのかもわからんね。

そういうわけで、マノに別れを告げる。

「お前、一人で大丈夫なのか？」

心配そうな瞳。マノは、根は悪いやつではないのかもしれん。私にやった事は一生忘れないがな！

「だいじょぶだいじょぶ。しっかりやれよー」

「ああ、任せろ」

マノは強い瞳で、見つめ返してきた。

「念のため、王族には絶対に会わないようにね」

「もちろんだ」

マノを置いて、私は再度旅に出た。

あれ、おかしい。目から鼻水が。

一人でも寂しくないんだからね。今までだって、一人だったんだから！

という事で、ちょっと大きな街についた。

さすがに旅費が尽きてきたので、日雇いをしながらその日暮らしである。

作品作って売るにも、まずその材料費や作業場が必要なのだ。

この街は、弱者に目を向けない。それが逆に居心地の良さを作り出している。

……しばらくここに定着するのでもいいかもしれない。

そんな日、久しぶりにパパンが現れた。憔悴していて、私を抱きしめる。

何度も口を開けて、そして閉じた。

「いいか、ルグナ。お前は結婚して、ハーレムを作って、宮廷魔術師になるべきだ。それがお前に相応しい道なんだ」

言いたいのは、多分そんな事じゃない。

「どうしたの、パパン」

パパンは切なそうな目で私を見つめる。パパン、私、近親相姦の趣味はないのですが。

「いいか、王都へ行って宮廷魔術師になれ。なってくれ」

「嫌だYO！」

答えると、パパンは泣きそうな顔で微笑んだ。

「すまん、無理を言ったな」

「……？」

「最後に、頼みがある。これを願う俺は、きっと最低な親で、最低な神だ。けれど……この国の王都へ行ってくれ。始まりはあの場所だから。いや、違う。行かないでくれ。お前が何よりも自分を大事に思うなら。殴られるままにしていたお前なら。王都に行っては駄目だ」

パパンは消えていった。

さっぱりわからない。けれど、私はパパンの言うとおり、王都へと向かうこととした。

八話 破滅の前兆（後書き）

落ちぶれ話がうまく書けなかった……orz

利用されて何気なくフェードアウト話も書けなかった……orz

駄目な作者を笑うがいいよ！ 粗筋詐欺と罵るがいいよ！

次回、チートです。

九話 ノーカンだから！

王都に行くと、なにやら不穏な空気が漂っていた。
荒くれ者が王都方面へと向かい、普通っぽい人が次々と王都から
逃げ出していく。

「魔王……」

「王都が一番先に狙われる……」

「リーファ様……」

不穏な言葉が漏れ聞こえてくる。

足早に歩きながら、情報収集をしていた。

そして、わかったこと。

リーファは王都に呼ばれ、勇者と呼ばれて滞在しているらしいこ
と。

魔王が出現するらしいということ。

一番に狙われるのは王都だということ。

パパン。

パパンは、この事を言いたかったの？

私は王都の門の前で立ち止まった。

すうっと息を吸って、吐く。

そして、しっかりとした足取りで歩いていった。

まっすぐに王城に向かい、じっと見つめる。

あそこには、きっとリーファがいる。

しばし見つめてから、街中へと潜っていった。

魔王復活までのカウントダウンは、結構正確らしい。
期限は一週間。

大事にとっておいたお金を使い、上等な布を買う。

手放さずにとっておいた針道具で、チクチクと縫う。

どうにか期限通りに縫ってみせると、私はその服を隠して、じつとその時を待った。

手出し無用なら、私はそのまま帰ろう。

どの道、チートを使いこなす練習をしていない私には、何も出来ない。

けれど。けれど。

もしも、リーファの力が及ばない、その時は。

私がチートを使わない。その事こそが、真実、私の前世をゴミにする。

それに、私の前世は、たった一人の人間は、リーファ含む、一所懸命に生きているたくさんの人間より高いなんて言えない。

だから、私は私のために。

たえ怖くとも、ここに留まる。

とか言いながら、実際に魔王が出たら泣いて逃げるかもしれないけどね。

私は隅っこでじつとその時を待つ。

空が真っ黒に染まり、私は脳内パソコンを起動し、出来たばかりの戦装束を纏った。

● R E C

真っ黒なマントが、バサリとはためく。

チートは既に使っている。戦装束をつくる際、ありったけの加護を

つけた。

さらに、脳内パソコンの基礎魔術に何があるかも調べてある。王都にいる魔術師たちも準備を終えていたらしく、王都は大きな結界で覆われた。

リーファが、空を飛び、王都の中心に浮かぶ。

雷と共に現れたのは、ドラゴンだった。

何匹も、何匹も、何匹も……そして、その中に一際大きいドラゴン。

その幻想的なまでの美しさに、私は思わず見惚れた。

「なんだ、やっぱりゲームじゃない」

現実離れたその光景に眩く。その時、私は現実を受け入れられていなかったのだと、初めて理解した。

リーファは、もう仮面をしていない。

美しい顔を凶悪な衝動に染め、大きいドラゴンに切りかかっている。

チートなのは、リーファばかりではない。

多くの戦士が、ドラゴンに向かっていく。

私はしばし、それを眺めていた。

もちろん、ただ眺めているのではない。魔力をチャージし、呪文を詠唱し続けている。

トリガーは。勇気を出すトリガーは。

私が前世の私を捨てる代償は。

たった一人の戦士の命。

一人の命を引き換えに、ピンチと判断し、攻撃しよう。

それぐらい、私は臆病だ。

多分、その一人を見捨てたことは絶対に消えない傷になるけれど。そんな私の耳に、リーファの狙いすましたような声が聞こえた。

「ルグナの住んでいるこの国を、絶対に壊させない！」

ドラゴンに斬りかかるその姿、まさしく勇者。

ドラゴンに反撃されて、リーファに似合わない女の子っぽい悲鳴が聞こえて。

それで、反射的に術を放った。

雨。雨。雨。

それはドラゴンを狙いましたように狙い撃つ、流星の雨。なんのことはない。

一番簡単な、単純な攻撃呪文の多重起動。

ダメージは与えられても、倒すことはできない。

場違いな宴に入り込んでしまったことは自覚してる。

けど、入ってしまった以上は踊らなくてはならないでしょう？

だから私は飛び上がった。

「くっふふう！ 謎の魔術師ちゃん参上ですう！」

リーファは抱きつきかけて、静止した。

あ、ちなみに衣装ですが、仮面の魔法少女式で声変えています。女の子に。

うん、色々魔法でごまかしているのでパンチラもばっちりです。

「どいつもこいつも辛気臭いツラしてやがりますう。勇者様あ！」

女の子は笑顔が大事ですう。笑って笑って☆」

ふ……。この状態で招待割れば私は（社会的に）死ぬ。

「ふ……。ふふふ。あはははっ笑わずにはいられないよ！」

ひとしきり笑った後、リーファは微笑んだ。

「じゃ、行こうか」

「あ、私、簡単な魔法しか使えないから！ 守ってね☆」

「うん、守る。守ってあげるよ」

きゃぴきゃぴと会話する間に、リーファに向かってくる炎弾を魔法で防御。

「ああん？ こっちは勇者様とお話しているんですう。意地悪しちゃ駄目ですう！」

驚いた顔をした勇者が、微笑んで剣を握る。

「ねえ、リーファ。変態紳士の方が良かった？」

「次は紳士がいいなあ」

「リクエスト、受理致しましたっ」

私達は笑いながら、戦闘に入った。

『ルグナ。お前の想い、確かに受け取った。加護を受け取るがいい……』

パパンが、微笑んでいた。

——高等魔術、インストールします。

闘いながら、それに目を通す。

適当なものを選んで、実行。

リーファと軽く視線を交わし合い、作った魔具を渡す。

——無茶するけど、心配しないで。

——信じてる、ルグナ。

そして、私達は激突し、私の魔術とドラゴンの炎は互いを消滅させた……。

○REC

と見せかけて。

炎の中で防御呪文使って転移呪文でトンスラです。
交信用の魔具渡したから、ダイジョブでしょ。

「ふiiiiiiii、疲れたよおおおお」

ぱったりと誰もいない草原で荒く息を吐く。

そこに、渡した魔具が煩く煌めいた。

「なによ、ドラゴンは皆やつつけたじゃない。第二形態でも残してたの？」

『ルグナ、ルグナ、ルグナ！ パパンが暴れてる！ 具体的にはルグナを吐き出せと言いながら死んだドラゴンの頭を掴んで揺さぶってる！』

なんですとお！？ ちょ、おま。あんた私が仮面で顔隠した意味

……はい、私の人生終☆了☆！

「言っちゃって！ 結婚式、呼ばないからって言っちゃって！」

ささやかすぎる口撃とリーファの斬撃は効いたようだ。パパンは
すこすこ帰っていったようだ。

言っておきますが。

重要だからしっかりと覚えておきますが。

パパンが何か役に立ったか!?

パパン召喚、害しかないじゃん。

呼んでないし! 呼んでないし! 呼んでないし!

し! 全く呼んでないし!

こっちが追加ポイント欲しいわ!なんて罰ゲーム!?

キーっ!

大体、このチートもノーカンなんだから! 普通になっている分には使わないですんだチートだし、ああもう虎の子の資金、変装に全部使っちゃったよ、バカア!

・パパン召喚 5回

復活させんな! 二度と来んな!

ぜいぜいと叫び疲れた私は、買っておいした干し肉をモグモグしながら、旅を続けるのだった。

十話 リーフアと王子

荘厳な王宮で、リーフアは足早に歩いていった。それを追いかける第一王子シルヴィ。リーフアは眉を顰める。

「リーフア。ルグナとは何者だ。パパンとはなんなのだ」

第一王子シルヴィの問いに、冷ややかにリーフアは答える。

「それを問わないことが僕を雇う報酬のはずですよ、殿下？」

「問わずにはいられるかつ 悪魔の加護を得しものだぞ！ あのパンという悪魔、凄まじい力だった。あれを利用できればっ」

リーフアは足を止める。

「悪魔に従えようと？ そんな事が本気でできると？」

冷ややかに見つめられ、第一王子は怯んだ。リーフアはため息を付き、幼子に話しかけるように言う。

「殿下。悪魔を意のままに操ることなど、できないのですよ。殿下は虫ケラにひれ伏しますか？ そのようなこと、なさらないでしゅう？ 神と人との間には、それ以上の差があるのですよ」

「悪魔を神と言うか」

「ええ、悪魔も神も人より優れた存在であることににおいては同じです」

そもそも、全く同じ存在である。神とか悪魔は、人が名付けた呼び名にすぎない。

「ルグナとやらが命じれば聞くのだろう。それにお前は悪魔より強い」

リーファは冷笑する。

「殿下。勝手に勘違いなさるのはご勝手ですが、それに私を巻き込むのはおやめ下さいね。神々の怒りを買うのも、悪魔の怒りを買うのも、僕はごめんです」

「悪魔に切りかかっていたではないか！」

リーファはため息を付いた。王族相手とは思えない態度に、シルヴァは地団駄を踏みたい思っていた。

「幼児が稚い手で殴りかかってくるのを本気を取る大人がおりましようか。……忙しいのですが、そろそろよろしいですか？」

「よくはないっ……！ 誰も彼も陰口を叩いているのは知っている。だが、お前はその中でも最悪だ。真正面から蔑んでくる。俺は第一王子だぞ！ ……俺のものになるのだ！」

「最悪をお側に置く意味がわかりません。私がお嫌いならば、近づかぬほうがよろしいでしょう。私は下賤なる平民です。それに、僕は既婚者ですの」

「は！ 夫がどこに居るといふのだ。どうせ偽りであろう」

「……それを信じないのは勝手ですが。私が殿下と結婚も同衾もしないという事実は毛程も変わりありません。人質でも取りますか？ 各種薬など、卑怯な方法でも使ってみますか？ どちらにしろ、私を敵に回せば後悔することになるでしょう。野生の獣を、貴族の御令嬢方と同じと見ると痛い目を見ますよ。手折れば言うことを聞くなど、温室の華ぐらいです。さらに言えば、僕の夫はとても頼りになる方です」

リーファからののはっきりした最後通告に、シルヴァは顔を歪ませた。

「勇者と名高いお前さえ、俺のもとに下れば……」

「ええ、皆、貴方を称えるでしょう。勇者を傳かせた王子といって、でもそれは、貴方に私を傳かせるだけの器量が必要なのです。そして、もしも私が地位に傳く小物であるならば、私が傳いても貴方が称えられることはないのです」

王子が殴りかかる。その拳を受け流し、リーファは何事もなかったかのように歩き去った。そして人知れずため息を付く。王族相手に良くない態度だとは思う。ただ、王子は十中八九、ルグナの話していたチンピラである。ルグナの話を聞いて以来、リーファから生まれに対する尊敬は薄まっていた。チンピラが王族の生まれになれるくらいである。全くどうにもならないと思われていた生まれが、実は一番簡単に手に入るものだったのである。ならば、本当に大事なのはその者の人格であり能力の「総量」である。

代々の生で善行を積み重ねてきた、真に優れた人間ならばポイント、すなわち恵みも多いはずなのだ。

一点特化にさえすれば、普通の人間でも一流の剣士になれるのだ。

だからリーファは、恵みの総量と人格を見るようになっていた。どれほど優れていると、才が一つの者はどうしても信用が出来なかった。

角を曲がると、顔を顰めた第二王子ギルヴァがいた。第一王子と違って、才多き男である。恐らく、第一王子とのバランスを取るべく生まれてきた男。だが、ホモに走ったのは神の誤算という他ない。前世が女性だったのかもしれないという好意的な見方をするには、ギルヴァが女装を「させるのが」好きという事実が阻んでいた。

部屋に招き入れられ、おとなしく従う。そこは予め、遮断の魔術が掛かっていた。音が外にもれないというものだ。

「相変わらず、君は兄上に手厳しいな。兄上はこの国の跡継ぎだ。私からお勧めしておこう」

「聞いていたのでしょうか？ 私は既婚者です」

ギルヴァが諭すように語る。

「強力な魔術師であるお前にはより多くの子供を産む義務がある。側にいない夫に何の意味がある？ 正式な結婚もまだだろう。なにせ悪魔に結婚式に呼ばないと脅すぐらいだからな」

「優れた夫婦の間に間抜けが産まれる事もあれば、間抜けの間に麒麟児が産まれる事もありましょう。親にさほど意味はなく、全ては子供の意思一つ。何より、僕は夫以外を相手にする気はありません。もちろん、ギルヴァ様も却下です」

「相変わらず、よくわからぬことを言う。が、そこがまたいい。君は女の中では一番好みだ。つくづく、男でないことが悔やまれる」

ギルヴァは男色であるが、見る目のある男色である。リーファはルグナから話を聞いていた。女装した男の絵を男と判別する恐ろしい眼の持ち主であるため、リーファの警戒は緩まない。なにせ、中は男、外見は女なのだ。事実ギルヴァは何かを感じ取っており、女の中では一番気安くしてくれる。それゆえに、内心は戦々恐々である。ルグナには悪いが、もしもの時は躊躇なくマノを差し出す覚悟を既にリーファは固めていた。

「話はそれだけですか？」

「いや。君の夫であり、君と同じ悪魔の御子であるルグナに関してだ。彼に悪意はなくとも、度々悪魔を呼び出されたのでは困るからね。どうなんだ？」

「……。あれは回数制限のある御技。既に回数は尽きています。イレギュラーがない限り、もう現れることはないかと。なにより、私もルグナも、ルヴァキル様の力を振るう事を望んでいません。良い意味でも、悪い意味でも。だからこそ、あの方は私達二人の言葉を聞き届けてくれるのでしょうか。イレギュラーも、私とルグナで協力して潰します。百年眠った王国のような真似は、させません。ルグナの誇りにかけて」

ギルヴァは面白そうな顔をする。

「珍妙な女装する男が、誇り高いと？」

「あの子の誇りは、理解出来ない場所にあるのです。……夫は渡しませんよ？」

「どうかな。男の娘は嫌いではないのだが、妙に食指が動かんのだ」

リーファはその言葉に戦慄する。やはりこの男、真の変態、真の男色である。的確にルグナの中身が女である事を見抜いているのだ。

「リーファ。一つ忠告しよう。家臣共は、お前に夫をあてがってこの国に縛り付けようとそれなりに必死だ。一ヶ月後の舞踏会には、ルグナに顔を出させるのだな。その一回だけしっかりしてくれれば、後は俺が協力しよう。ついでに結婚式の準備もしてやる」

「そして殿下はその一回でルグナを懐柔するというわけですね。ルグナに会うことがあれば聞いておきます」

「毎日睦言を交わしているくせに」

ギルヴァの言葉にリーファは戦慄する。やはり、国を支えるべく産まれた男は手ごわかった。

その頃のpapan達。

「いいですか？ ルグナの訴えは最もです。ルグナに益を与えるべき召喚は多大な不利益をもたらしており、これは補償すべき問題です。つまり、召喚回数を十回に！」

「不利益をもたらす召喚を増やすという事に疑問を覚えてください。当人からも回復厳禁という願い出が届いているではありませんか」

「しかし、呼ばれてないのに出て行って不利益を出した回数はノーカウントにすべきだと思うのじゃが」

「そもそも勝手に出ていかないで下さい。大体、貴方方は何度始末書を書けば気が済むのですか。ルヴァキルはもちろん、他の皆さんも魔物の出現位置をお告げするのはやめてください。そもそも、魔王は必要な過負荷。愛のムチであり、超えねばならぬ試練。神が自ら出て倒そうなどというのは本末転倒。不受理です」

「ルグナの結婚式……ルグナの結婚式……」

「外出許可は出しませんよ。後、始末書を書かない限り夢の中にも出てはいけませんよ。これを無視した場合、呼ばれない限り夢に出る権利も剥奪します」

「しかし、平和を愛するあの子達に戦いは酷です」

「相変わらず曇った眼の持ち主ですね。子供達は明らかに加護過多であり、どうしても試練は必要です。この程度の試練も乗り越えられぬようなら、それは鍛え直す必要があるという事。ルグナと言いましたか。貴方達がマイナス三万ポイントと評価した性格のこの子でさえ、必死にあがいて生きようとしているのですよ。栄養の与え過ぎは却って毒となります。何このチート。ルグナが嫌がるのも無理はありません。補償は却ってあの子の邪魔となります」

愛のムチを担当する部署が、キビキビと神々にも愛のムチを振るっていた。

更にその頃のルグナ。

「結構恵んでもらえるもんだね。うーん、この服じゃ雇ってくれるところもないから、しばらくは物乞い生活かあ。そういえば、最近パパンからの連絡ないなあ。べ、別に寂しくなんか無いんだからね！」

十話 リーファと王子（後書き）

お気に入りが増えていたのでびっくりしました。
ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286y/>

パパン、私は幸せです

2011年12月18日20時53分発行